

# 沖縄の自治会と自衛隊基地 (3)

## ——瀬長島の跡地利用と観光地化——

関西大学 南 裕一郎

### 1 目的

本報告では、瀬長島（沖縄県豊見城市）の跡地利用をめぐる約40年にわたる経緯を跡づけるとともに、そこが本土の観光業者が主体となって観光地・リゾート地として開発されていくようになる過程を、観光業者、豊見城市、地元住民の三者の関係の態様に着目しながら考察する。瀬長島は豊見城発祥の地として高い神聖性を有していたこと、1977年まで米軍の弾薬庫として使用されており島内が激しく破壊されたこと、返還後は市街化調整区域に線引きされたため開発が容易ではなかったこと、沖縄振興一括交付金が瀬長島に投入されたこと、そして県内企業ではなく大阪に本社を置く本土企業が開発を進め、（現時点では）大きな収益を生み出していること、これらの諸点が考察上のキー・ポイントとなる。

### 2 方法

瀬長島開発の経緯については、村史・市史に加え、広報紙（『広報とみぐすく』）や県内2紙などの文献資料、豊見城市教育委員会でのヒアリング調査をもとに整理する。近年の瀬長島開発をめぐる動きについては、開発主体である観光業者（WBFリゾート沖縄）および関連業者、豊見城市、宇瀬長地区の住民らへのヒアリング調査を中心に分析をおこなう。

### 3 結果

瀬長島は、琉球開闢の神アマミキヨの子がここに集落を造ったとされることから「豊見城発祥の地」といわれ、たいへん神聖な島と考えられている。戦前は有人島であったが、米海軍の弾薬庫として接収されるにともない島民は退去させられた。同島は1977年に返還されたが、瀬長グスクや子宝岩はじめ多くの遺跡や拝所は米軍施設建設の際に破壊されていた。それでも、拝所を再建・移設することによって、地元住民にとって瀬長島は引き続き「神聖な島」でありつづけた。一方、瀬長島は那覇空港を離発着する民間機・自衛隊機の航路の直下にあたるために市街化調整区域に区分され、開発行為は原則としておこなわれず、島内の荒廃を招くことになった。毎年の施政方針では瀬長島の開発が俎上に上るものの抽象的な表現で示されるのみで、開発への機運はしだいに薄れていった。

瀬長島が急展開するのは2000年代に入ってからのことである。「ここに露天風呂があったら日本で一番の温泉になる」と、県の開発許可を取り、温泉掘削を開始した大阪の旅行会社があらわれた。2012年には同社による「瀬長島ホテル」が、15年には「ウミカジテラス」が開業した。また豊見城市も、12年度に新設された一括交付金制度により「瀬長島観光拠点整備事業」を開始し、瀬長島の観光地化に向けた広場・施設等の整備を進めていった。かくして瀬長島は、返還後30年以上の空白期間を経て、「沖縄の風土とアメリカ世テイストのコンビネーション」なるコンセプトで観光開発が進められ、訪沖観光客数の増加を追い風に多くの訪問者でにぎわうようになった。

### 4 結論

本事例では、豊見城市が長年開発しあぐねていた瀬長島の跡地利用において、外側から半ば偶発的、しかし半ば必然的に現れた本土企業が、短期間のうちに種々の開発許可をクリアし、開発の主導権を握っていった。そこにはアイデアの斬新さもさることながら、一方で行政との協働や地域社会への配慮、他方で沖縄的労働観の“常識”には一切与しない姿勢が指摘できる。今後各地で展開される軍用跡地利用においても、同様の手法で参入する本土企業が県内企業を凌駕する可能性がある。